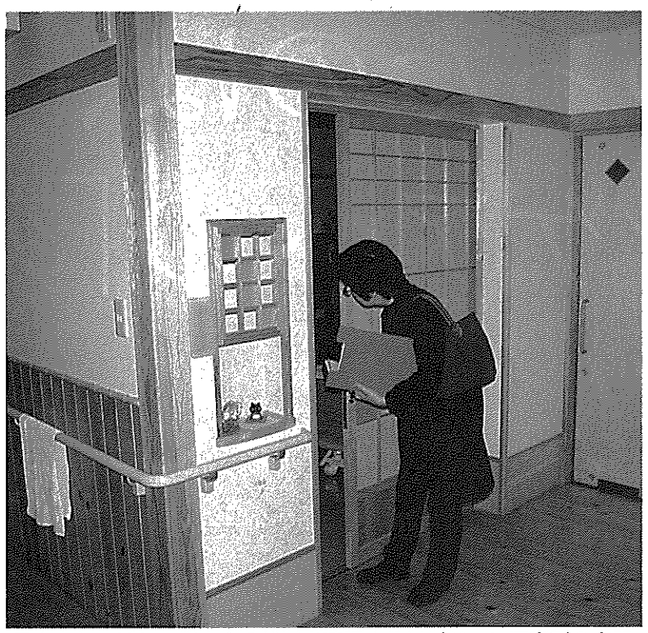
生活

seikatsu@asahi.com

虐待防げ――NPO、深夜に訪問

川崎市の有料老人ホームで入居者が転落死した事件の発生は、逮捕された元職員の夜勤中でした。過去の深刻な虐待も多くは夜勤帯に起きています。虐待を防ぐには「抜き打ち調査」が効果的とされます。こうした取り組みを行っているNPO法人の調査に同行してみました。

老人ホーム 抜き打ち調査



足音をしのばせ、居室内の状況を確認するUビジョン研究所の本間郁子理事長＝3月、熊本県人吉市（画像の一部を加工しています）

拘束・においチェック

熊本県人吉市にある特別養護老人ホーム「龍生園」。3月中旬の夜、真っ暗な正面玄関前にNPO法人「Uビジョン研究所」（東京都）の本間郁子理事長ら調査員2人が姿を見せた。

午後11時35分。インターホンを鳴らす。「Uビジョン研究所の抜き打ちです」。鍵をあけた夜勤の女性職員に抜き打ち調査実施書を渡す。

龍生園には117の個室と、ほかに短期入所用の個室が16ある。表札のかかった居室の扉を開けて中をのぞく。不適切な身体拘束がないかどうかに加え、「におい」も調査の重要ポイントになる。

衛生面で問題がないか、後で確かめる必要があるためだ。居室のほか、トイレや浴室、台所も対象。冷蔵庫は扉をすべてあけてチェックする。

あるフロアでは、居室のタンスの上に未使用のおむつがむき出しで置かれていた。本間さんは指摘事項のメモに残した。「介助しやすいようにしているのでしょうが、プライバシーの問題があります」

短期入所用のある居室ではベッドに柵が取りつけられ、入居者の女性が自力でおりられない状況だった。「拘束ではないかな」。本間さんは女性職員に確認した。介護施設で原則禁じられている身体拘束には、ベッドを柵で囲むことも含まれる。

入居者の女性の左手は青黒くはれあがっていた。肩を骨折しているのだという。職員によれば、ひんぱんに立ち上がろうとするため転倒の恐れがあると考え、柵をつけた。

「私個人の判断でした」と職員。やりとりの後、ベッドから柵を取り外した。この日の担当は夜勤専門の職員だった。「利用者がひんぱんに入れ替わる短期入所を夜勤専門の職員だけで対応するのは厳しいと思う」と本間さん。

別の部屋の扉に本間さんが耳を近づけた。もれ聞こえてくる職員と入居者の会話を盗み聞きする。「子ども扱いするような言葉づかいは虐待の温床になる。この職員は、丁寧な言い方ができています」

調査を終えると、施設側に結果を報告した。本間さんはまず、ベッドの柵による「拘束」について伝えた。短期入所部分は正式契約上は評価の対象外なのだが、重要な事柄だったためだ。

この日の夜勤者は7人で、1人が二つのユニット（最大計20人）を担当。龍生園によると、本来はユニット担当者に加えフリーの夜勤者1人をサポートとして配置していたが、退職などで一時的に人手を確保できなくなっていたという。4月以降は再びフリー夜勤者をつけるようにすると、説明があった。

課題を指摘する一方、本間さんは「利用者の話に最後までできちんと耳を傾けている」と職員の姿勢をたたえた。入居者の好みに応じたシャンプーを使っている点なども「優れている」と評価。最後に「この施設ならお世話になりたいと思いました」という感想を伝えた。

外部の目、入居者守る

Uビジョン研究所による抜き打ち調査は、2011年から取り組む施設認証制度の一環で実施している。本間さんは、身寄りがなかったり重い認知症だったりして虐待を受けても声をあげられない入居者の急増に危機感を強める。

「コールすら押せない人も多い。家族の目も届かず、施設管理職も実態がわからない」

ただ、費用を払って厳しい第三者チェックを受け入れようという意識の高い施設はまだ多くはない。対象は現在、全国で6施設。ケアは全国トップレベルと、本間さんが太鼓判を押す施設ばかりだ。

龍生園で虐待の心配はないようにみえたが、簑田義清・総合施設長はリスクを軽視しない。「夜勤中に職員が担当外のユニットに立ち入ることはまずない。（同僚の目が届かず）それだけで虐待が起きる可能性は十分にある。客観的な目が必要です」

厚生労働省は、都道府県などが介護施設に定期的に行っている実地指導を抜き打ちでも可能にすることにした。しかし、自治体からは「要員不足」を訴える声も聞こえており、実効性に不安は残る。

介護施設の職員らによる高齢者虐待は14年度に300件が確認され、前年度に比べて35・7%増えた。本間さんは近く、外部評価の義務化や夜勤職員の配置基準の改善などを厚労省に要望する予定だ。

（編集委員・清川卓史）

デジタル版「介護とわたしたち」に詳報

母娘の微妙な関係、みなさんの場合は

みんなのひととき

女どうしだからでしょうか。母と娘は親友のように仲が良いこともあれば、ライバルのような関係、あるいは長い間打ち解けられない関係になってしまうこともあります。そんな母や娘に対する微妙な気持ちや出来事を、ぜひ「ひととき」につづってお送りください。

本文500字以内。住所、電話番号、名前（ペンネーム不可）、職業、年齢を書いて、〒104・8011 朝日新聞文化くらし報道部「ひととき」係へ。ファクス03・5540・7354、メールhitotoki@asahi.comでも。

ひととき

長女が家を出て10年が経とうとしている。

勉強も何もしないように見えた娘に、私の小言は絶えなかった。娘も嫌気がさしたのか、大学は下宿すると言い出した。国立大ならという条件をクリアして地方へ行ってしまった。

東京で就職が決まり「家から通ったら」と声を掛けたが、駅から遠いことなどを理由に断られた。「元気なの？」「休みに出かけない？」とメールや電話で連絡しても返事はなかった。下の娘が時折様子を教えてくれたが、家族さえも卒業したつもりなのかと思い、とても寂しかった。

患者を生きる

3024

がん

闘病の決意 短歌に込め

読者編 1

「患者を生きる」シリーズの2～3月の連載にいただいたお便りを紹介します。今回は「短歌のはげまし」編へのエピソードです。

●短歌に重ねた夫との時間

今も携帯電話の待ち受け画面にメモしている短歌があります。

一日が過ぎれば一日減ってゆく君との時間　もうすぐ夏至だ

（乳がんで亡くなった）歌人河野裕子さんの旦那さん（永田和宏さん）の歌です。5年前、53歳だった主人が末期の膵臓がんを宣告され、治療はせず自宅で過ごしていた頃に知りました。

私は会社を休み、一緒に過ごしました。「ああ、おいしいねぇ」と好きなものを食べ、「海が見たい」とドライブ。本当に気ままに自由に、でも残された時間はいまでも確実に減っていく、そんな日々でした。

この歌を知って、あまりにも気持ちがわかり過ぎて怖いくらいでした。ただ、覚悟は持てました。一日一日を、普通に、本当に普通に過ごすしかないし、それが最善なのだと。

主人はその年の6月に旅立ちました。夏に向かうころ、この歌とともに、あの覚悟と、主人の「おいしいねぇ」を思い出します。

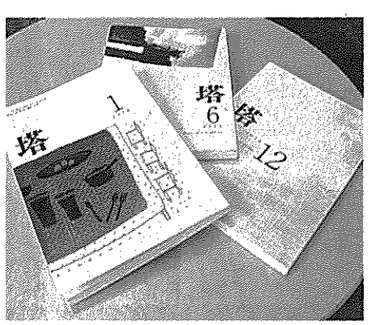
（愛媛県　矢野景子　49歳）

●気持ちを言葉にできた

8年前に子宮体がんの手術を受けました。手術後、抗がん剤治療中に、姉に勧められて短歌を詠み始めました。その後、再発して放射線治療も受けました。

癌病めば尚背を伸ばし歩み行く我に光れる春の白雲

病院の窓から見た光景に、「負けてはいられない」と決意し、最初に生まれた歌です。短歌で気持ちを言葉にでき気分になりまら、闘病を乗かったかもし



連載に登場した岡部史さんが会員になっている短歌結社「塔」の冊子＝「短歌のはげまし」編から

連載中の一いい」という思います。真望と希望を味ベッドの上れば、患者になると思いまになることお元気に過ごし集を出すこと

（大阪府

◆5回連載